

書評

老いを育む

柏木哲夫(著)

四六判・196頁

定価1,760円(本体1,600円+税10%)

ISBN978-4-89590-744-6

三輪書店刊, 2021年



構えをほくことから

[評者] 鷺田清一

病も老化も心の持ちようだと、お医者さんから言われるとうれしくなる。

柏木先生はたとえばこんな例をあげる。同じ交通事故に遭い「むち打ち症」のかなりきつい症状に苦しむ二人の患者さん。その一人は、「えらい目に遭いました。でも、頭を打たなかったし、外傷もなかったの、それはよかったです」と言う。もう一人は、追突した運転手が許せないと憤り、なぜこんなめに遭わないといけなのかと「恨みの感情」をつのらせる。このあとの入院治療と回復の経過は二人のあいだで大きく異なったという。もちろん前者の退院のほうがうんと早かった。医師は存外、ここをしっかりと診ているのだ。

ぼくらは病気といえば、治療も経過も、最後は医師の判断にまかせるほかないと、あたりまえのように思っている。医師だけでなく患者であるぼくらまで、病という、その人の暮らしという文脈から切り離し、現象として孤立させて考える。だから、人という存在においては、身体から心へと向かうベクトルよりも、心から身体に向かうベクトルのほうが強いのではないかと、お医者さんが自問するシーンに出くわすとはっとする。

と、お医者さんが自問するシーンに出くわすとはっとする。

柏木先生の提案は、どれもみな凝りつまった人の構えをほくいてくれる。ほのかにぬく手でマッサージしてもらっているみたいに。

「鍛える」より、「育てる」より、「育む」と言ったほうがうんとい、と言われるが、これには大賛成。ほくも同じように、教育について、その仕事は子どもを「育てる」ことではなく、そこにいたら子どもが勝手に「育つ」ような空間を用意しておくことにあると、主張してきた。子どもの力を信じるのである。

ユーモアをととても大切にされるのも柏木先生らしいところで、ユーモアはじぶんに密着しては沁みだしてこない。「人間は死が近いにもかかわらず、笑うことができる」というのも、じぶんの内に隙間を空けられるということだ。

きわめつけは、順調に弱る話。末期の肺がんを患う女性に、ふつうの病院では退院時、患者さんに「ありがとうございました」と言ってもらえるのに、ホスピスでは治るということがないから感謝もされない大変なお仕事ですねと言われて、柏木先生はこう返した。でも

痛みがとれて喜んでいただいたときはとてもうれしいですよ、と。そしてその患者さんに残り時間も少ないある日、「いかがですか?」と声をかけると、患者さんは「おかげさまで順調に弱っています」と答えた。聞いた柏木先生はそこに深いねぎらいを感じた。

そういえばもう20年以上前に訪ねた北海道・浦河の精神障害体験者の施設「べてるの家」でも、医師は患者さんが妄想に苦しんでもパニックを起こしても、「順調、順調」と口にしていて、人には「超えてはならない苦勞」がある、それはけっして失敗ではないんだと言い、「その悩み、捨てるなんてもったいない」「この苦勞、けっこういい線いってるねえ」と声をかけるのだ。

最後に、「散らす人生」という考え方。じぶんのまわりにお金や物や知識を集めるのではなく、逆にいろんな持ち物をまわりの人たちに散らす。なかでも重要なのが時間。時間を人にあげるというのがケアの核心だという考え方だ。しっかり頭に刻み込んでおこうと思った。